

不器用でも

一生懸命な先生が好きだ

山田洋次

映画監督



先生の資格は
子どもを
好きであること

「学校」の第一作目のモデルになった下町の夜間中学に、はじめて行ったのは1970年代でした。教育的な環境はまたいい時代だったと思います。

夕暮れに登校する生徒たちが、教員室に顔を出して名札をひっくり返しながら、「今晚は」

と挨拶をする。そのまま先生のところに行つてべちやくちやおしゃべりをする生徒もいる。先生同士の交流もあったかくて、教員室が騒然として活気に溢れていてね。「ああ、いい学校だな」と思いました。

その頃、ふつうの中学や高校の教員室にも行つてみると、意外にヒヤツとした雰囲気を感じたものですが、その傾向はどんどん強まっていると思う。80年代、90年代を経て、先生たちの活気にあふれた議論や笑い声が、日本中の教員室から消えて

いるんじゃないでしょうか。なぜこんなことになるんだろうか。子どもたちが行きたくなるような、和気あいあいとした教員室がなぜなくなつてしまふのかという疑問を、僕はすつともつています。

この30年くらい、学校はひたすら縦のコントロールを強化してきた。校長や教頭の権限が強くなり、先生たち、とくに若い教師たちは管理職を目指すようになってきた。自分分は教頭や校長になるために学校に入ったんじゃない

い、一生平教師だという考えの人たちの居心地がだんだん悪くなっている。

94年でしたか、北海道の高等養護学校に行つたときのことです。知的障害児の高校だったから、8人から10人くらいが単位の教室で、教師が二人か三人いて、それぞれの子どもの能力に応じた授業をしていた。ある教室の後ろのほうに畳が一枚置いてあってね、どうしても椅子にじっと坐ることできない生徒と、彼にかかりきりの先生が二人で坐つて授業をしている。

そのうち二人ともくたびれて、もたれ合つて眠りはじめたんです。暖かい光が窓からさしてその二人を照らしていてね。ああ、これが教室というものなんだなと感動したものです。

授業中に居眠りするような教師は、管理者から見ればいい教師じゃないかもしれない。でもその教師は子どもがひたすら好きで、子どもに愛されることについては人後に落ちない人でした。教師にとつて一番大事な資格はそれじゃないですか。子どもといっしょにいるのが好きであること。

そういう資質は書類で計ることができない、試験ではわからないことでしょう。ある人が優秀で他の職場に行けば大変な能力を発揮することはあつても、その人が子どもが嫌いなら学校の教師には全然向かない。なるべきじゃないと思いますね。

教師は教室の
ゴミになれ

その高等養護学校の校長を長年つとめていて、今はリタイアしている本間さんという人は、「教師は教室のゴミになれ」

